

貨幣史研究会（東日本部会）第8回
平成13年12月19日（水）13:30～17:00

<出席者>

座長：鈴木公雄・慶應義塾大学教授
報告：柴原永遠男・大阪市立大学教授
コメント：松村恵司・奈良文化財研究所

その他の参加者（五十音順）：

井上正夫・京都大学博士
今村啓爾・東京大学教授
大久保隆・一橋大学教授
田中浩司・函館大学専任講師
中島圭一・慶應義塾大学助教授
安富 歩・東京大学助教授

研究報告ならびに討議の様様（文中敬称略）

柴原永遠男「石山寺増改築工事の財政と錢貨」（併せて別添1レジュメ参照のこと）

（はじめに）

古代史の文献史料の中では、正倉院文書が一番中心的な文献史料。これをどう使いこなすかが文献の側での古代錢貨研究の重要なポイントである。今回はそのうち中倉文書の造石山寺所関係文書に限定した話となる。造石山寺所関係文書については多くの先行研究があり、基礎的研究、その上に立った部分的な研究も多くなされている。しかし、錢貨の流通そのものに焦点を当てた研究はない。この工事をめぐり、物資の移動・労働力の動員が引き起こされたが、その中で錢貨がどのように関連したか、どのような役割・機能を果たしたかを史料の中から探っていきたい。

（「造石山院所解案」秋季告朔^{うしづき} 史料 p.1～6<A3版>,表 A<A4版表>）

告朔は定期的に出される事業報告書である。この「造石山院所解案」秋季告朔は石山寺の増改築工事の最終決算報告書であり、収入・支出の諸物資が列挙されている。ただし、帳簿操作が行われていることを考慮しておく必要がある。冒頭部に錢貨に関することが書かれているが、傷みが激しく断片的にしかわからない。

まず史料1ページ①の「請奈良司」より、奈良にある上級官庁である造東大寺司から、何回かに分けて錢貨が供給されていることがわかる。収入が造東大寺司からだけであるかは不明であるが、「年料租米内五石五斗」は、おそらく愛知郡封戸から徴集した租である米の一部を売却して錢に換えていることを指すと考えられる。

支出に関しては、史料2ページ②に見られるように、木材採取機関である「山作所」及び造営工事現場である「足庭」関係と、信樂にあった建築物を解体移築した「買信樂殿」関係の少なくとも2項目に分けて記載されている。

このうち山作・足庭について検討する。史料1ページ③にある「功」は労賃・賃金を指し、労賃への支出であり、その内訳が④～⑥である。また⑦～⑨には、様々なものを買った支出項目が並んでいる。これらがお金に関する部分である。また2ページ下段以降はそれぞれの物品をどのように入手し、利用したかを詳細に書き上げている。

表Aは、これを物品ごとの入手方法に着目し、整理したものである。そのうち「買」の項をみると、何をどれだけ購入したかがわかる。これによると容器等（陶器類・鉄釜1点・

木製の手工業品)が石山周辺で流通し、購入していたことを示している。また資材についても、白綿などは手工業品の流通を示し、漆・藁は相当大量に購入している。檜皮は購入・供給双方見られ、また同じ場所で違う手段で入手していたり、造営工事現場の中まで持ち込まれたものを購入しているケースも見られる。食料については、米は封戸の庸・租からの供給が170石、購入は90石である。また塩はほぼ9割方を購入しており、塩がかなり流通していたことを示すものである。以上のように物品により入手方法に特色があることがわかる。これらをどこでどのように購入したかが最も知りたいところであるが、それは不明である。

(「公文案帳」史料 p.7~8)

「公文案帳」は造石山寺所の発信文書と受取文書双方がわかるものである。史料8ページ⑭は、造石山寺所が造東大寺司に宛てて出した上申文書である。ここに「この市(此市)では買えないから、そちらの市で買ってこれ」とあり、造石山寺所周辺に市があったことがわかる貴重な史料である。つまり造石山寺所はその周辺の市を利用している可能性がある。古い地籍図などをたどると古代の瀬田橋の橋の袂に「市ノ辺」という小字が残っている。おそらく橋の袂に市が立っており、それが「此市」にあたるのであろう。

(「造寺料銭用帳」史料 p.10~13,表B)

この帳簿は石山寺の造営に必要な物品購入のための日々の支出記録である。これを決算報告書(「造石山院所解案」秋季告朔)と比較すると、大半の品目が両方の史料に共通して現れるが、どちらかの史料にしか見られない品目もある(レジュメ2ページ、下の表)。これは決算報告書が辻褃合わせをしていることを窺わせる。

銭用帳に見られる購入品の特色を見ていく。容器類をみると、決算報告書では鉄釜が見られ鉄製品の流通を示す重要な史料であるが、銭用帳では見られない。しかし、銭用帳では鎌の購入が見られ、やはり鉄製品の流通が想定できる。食料については、決算報告書に比べ、実際はかなり様々な食料を大量に購入していることがわかる。このことは、その売り手も造営現場付近にいたことを示す。

この帳簿で一番注目すべきは、費目の流用が行われていることである。例えば史料11ページの6月20日に粉酒を買うため銭33文を支出しているが、「経所仕丁功料内」とある。

「経所」とは石山寺写経所で造営担当部署と同じ所にあったが、別の組織であった。その経所の財源を流用している。経所の給料として計上されたものを、造石山寺所の粉酒のために使ったということである。そのような費目の流用を表にしたのが表Cである。流用され始めたのは6月前半頃からで、まず給料の費目が流用された。給料は銭そのもので用意され、流用しやすいためである。写経所用の米の流用は、米を売却して銭貨に変える必要から、1ヶ月遅れて7月からであった。この事実は、米を換金できる環境が石山周辺に形成されていることを前提としている。

(「米売価銭用帳 第二帳」史料 p.14~15,表D)

以上のように写経所財源が流用されているが、この時も写経事業は継続していた。この流用は造石山寺所の財源不足によるものであるが、写経所について別の史料からみていきたい。「米売価銭用帳」は写経事業側の史料で、写経所の米等を売却し、様々な物品を購入した帳簿である。この史料を整理した表Dを見ていくと、8月15日には、売却した豆類の代金を甲賀山作所事務員の橋守金弓に渡している。

また米を売却し、米を購入している事例がある。売却額が不明ではっきりとはいえないが、利ざやを稼いだ可能性が高いのではないかと推測できる。

このほか、勢多荘の領(担当責任者)である猪名部^{いづみべ}板虫に2回にわたり2貫宛を支給し、米を購入させている。米の購入に勢多荘という荘の組織が動いている。勢多荘は瀬田川の

河口にあった荘と考えられ、先程の市のすぐ近くにあったのであろう。つまり、勢多荘という別組織まで動員して、米を購入させていることが明らかとなる。

また、この帳簿には支出項目の中に給料は見られない。二つの支出帳簿「造寺料銭用帳」表 B と表 D「米売価銭用帳」の財源は別であることがわかる。「米売価銭用帳」は写経所の財源を売却して銭に換え、造営工事費用にも宛てられた帳簿である。両者を併せたものが造営工事現場の銭の支出であり、銭の使用規模はかなり大きかった。

（「雑物収納帳」 史料 p. 16, 表 E）

では造営工事側の銭はどこから入ってきたか。「雑物収納帳」は造石山寺所が受け取った銭や物品の記録である。この史料より銭がどこから造石山寺所に供給されているかがわかる。史料中の「上院」「奈良寺政所」等がどの組織に該当するかを検討するため、史料 7～8 ページ「公文案帳」を見ると、記載が「雑物収納帳」と対応している。この史料よりこれらの組織が東大寺上院と造東大寺司政所であることがわかる。史料 7 ページ①は、銭を出してくれと造石山寺所が造東大寺司政所へ解を出したところ、銭は別組織である東大寺上院より支出された。これらの史料より造石山寺所は、造東大寺司政所と東大寺上院双方を財源としていたことが明らかとなる。

（山作所と銭貨 史料 p. 17～24, 表 F）

定例の業務報告書である告朔解（田上山作所から造石山寺所へ提出された文書）をみると、田上山作所では、銭はすべて造石山寺所から支給を受け、給料支払いが大多数を占めている。田上は石山寺のすぐ南であるが、ここではあまり物を購入していない。

田上山作所と異なり、甲賀山作所（信楽周辺と推定）は様々なものを大量に購入している。注目すべきは「自荘請」とあり、「荘」は勢多荘を指す。甲賀山作所は、造石山寺所からだけでなく、勢多荘という別組織からも銭を受け入れ、それを財源として動いていることがわかる。

勢多荘では何かを売却して銭を入手していたと思われる。おそらく勢多荘は先程の「市」と関わりを持ち、物品の売買を行っていたのであろう。

（「雑材并檜皮和炭納帳」 史料 p. 25～27, 表 G）

「雑材并檜皮和炭納帳」をもとに、どこで何を入手したかを検討すると、琵琶湖のかなり北の方にある高島で榎樽を購入している。また甲賀山作所のすぐ近くの三雲山で檜皮を購入している。三雲は近くの野洲川沿いに三雲津という港があり、甲賀の山で切り出した材木をそこに集積し、そこから野洲川経由で琵琶湖に運び、琵琶湖から石山に運ぶという拠点的な場所であった。おそらく三雲に市のような物品売買の場所があり、そこで物品購入を行っていたと考えられ、三雲の機能は大きい。

（まとめ）

石山寺増改築工事に伴い、銭貨を媒介とした様々な物資の動きが周辺で起きており、レジュメ 5 ページの図のように整理できる。造石山寺所・勢多荘・市の三つが琵琶湖南端の銭貨流通のかなめとなっていたと考えられる。さらに琵琶湖周辺地域へも銭貨は流れている。市や売買地で支出された銭はその後も流通したはずであるが、今回の方法では明らかにできない。

銭貨は、畿内以外では近江国の出土例が非常に多い。その背景には以上のような銭の流れがあったのであろう。

< 栄原報告へのコメント（松村） >

「造石山院所解」を 20 年程前に勉強したことがある。奈良時代の造営文書は、「造石山

院所解」「造金堂所解」「造仏所作物帳」の3本が基本的なもので、畿内の寺院を発掘する上で必要な文献ということで、3編通じて講読した。

これまでは、例えば百万塔の調査をしていた際に、同時代の工房において労働力の編成と賃金支払のシステムがどのようなものであったかをみるために造営文書を講読した。また、古建築の部材の名称が詳細に記されているため、造営工事の具体的な内容・奈良時代の貴族の建物の細部構造を知る上で非常に重要な史料であるということで講読した。土器・金具類の器名・品名考証や、物価変動を見るための史料としても使用してきた。

栄原先生は律令国家の中央交易圏を提唱されているが、その流通経済の具体像を探ることが今回のテーマであると思う。先生は8世紀の銭貨研究でその歴史的特質を多面的に追求されてきている。銭貨の特質として、新銭発行と造営事業との関連を史料的に裏付け、巨額な造営費が国家財政を圧迫することに対して、銭貨の発行は支払手段として財政的意義を持っていることを鮮明に打ち出された。律令国家が財政的利益を目的に一方的な支払手段として名目貨幣を発行したという、古代銭貨流通の側面を明らかにした。

もっとも、銭貨は社会に一度放出されると法定価値を持っているため、法定価値で回収しなければならない。回収量は一部にすぎず、回収作業は財政的利益を伴わない。こうした観点で考えると、律令国家は銭貨発行で莫大な利益を得るにせよ、支払手段という政策的意義のみを優先したのではなく、通常時の貨幣の意義に関して何らかの異なった機能を想定していたのではないかと思う。

特に8世紀の律令国家財政は、あくまで租税として全国から收取された諸現物が政府財源であったと考えて間違いないと思う。その一方で現物の一部に、布のような物品貨幣と呼ばれるような位置付けをなされるものもあり、貨幣機能を有していた。そうした物品貨幣と銭貨の構造的連関を律令国家の財政運用の中で分析し、銭貨の果たした役割・本来的な機能を明らかにする研究を栄原先生はなされており、今回の報告はその一連の作業であったと考える。

今回の史料に関連して、法華寺造営に伴う「造金堂所解」では、銭貨の収入と現物収入が半々であり、現物を銭貨に換え必要なものを購入している例も見られる。律令国家は、物品貨幣に対し貨幣として100%の機能・効果を期待していなかったといえるのではないか。多面的な造営費用の支給のされ方を、今回の史料だけでなくいくつかの史料を対比させながら検討していく必要があるかと思う。物品貨幣の場合はそれを売却して銭貨に換えなければ役割を果たせない事情があり、銭貨独自の持つ役割に焦点を当てた研究を深めていく必要があることを、今回の先生のご報告を聞いて痛感した。

(栄原) 当初は、最初に挙げられた3つの造営史料を対比させようと考えたが、史料のレベルが大分違うため、帳簿類がたくさんある石山だけに絞った。石山以外の二つは最終決算報告書にあたる史料しか残っていないが、今回の成果を踏まえ、残りの2つの造営史料も見直していきたい。

物品貨幣についても重要なご指摘と思う。正倉院文書は財政的な帳簿であるので、役所レベルのモノ・銭の動きしかつかめない。おそらく、役所と別の次元では、銭以外のものを含めたもう少し違う流通の世界があるのではないかと思う。そのためには石山のように帳簿類がたくさんあるところで克明に研究し、別の次元への入り口を見付けなければいけない。石山ではすべてお金で購入しているが、それが実態を全て反映しているかどうかといった別の問題もある。

— . — . —

<質疑応答>

(鈴木) 造東大寺司・東大寺上院が銭を支給していたということだが、その銭はどこからくるのか。

(栄原) 史料的制約を前提とした上であるが、僅かな史料から一つは太政官であることが

わかる。また造東大寺司の写経所機能を考えると、銭貨に関しては造東大寺司は媒介機能を果たしているだけであり、銭貨は写経の発願主である内裏から来ていることになる。その内裏へどこからきたのかは史料的には突き止められない。

(鈴木) 律令財政全体の枠組についてであるが、それぞれの組織がどれだけ使うかにより、鑄銭量が決まってくる可能性もある。律令財政は天皇の意思によるアドホック的な予算配分なのか、あるいは官僚機構により経常費等を勘案したものであったのか。

(栄原) 奈良時代の銭貨流通は律令制全体の枠組みの中で考えなければ絶対わからない。また、制度はある程度わかっても、その制度の実際の運用まで捉えるのは難しい。何か事業を行うときは各役所で見積もりをたて、それを上級官庁にあげ、最終的におそらく民部省が集計する。鑄銭司で鑄銭されたお金は大蔵省にプールされている。民部省は、プールされた額を把握し、それを勘案しながら配分を行ったのであろう。

(鈴木) 租税収入の集積・配分はどのようなメカニズムであったか。

(栄原) その点は焦点の一つである。木簡類から考えるのが一つの手立てで、長屋王家木簡が適当だが、この木簡も一貴族の状況を示すにすぎない。全国から物資が集積したのは主に大蔵省の蔵であろうと考えられる。どのようにチェックして収納したかは長岡京の木簡等から明らかになってきている。

(安富) 史料にある銭は何か。

(栄原) ほとんど和同開珎であろう。ただし史料上「新銭」という記載が見られ、天平宝字5年なので万年通宝という可能性もある。

(安富) 米を売って、米を買うという史料は、奈良東大寺にある石山分の米を奈良で売却し、銭にして近江に運び、そこで米を購入したとは考えられないのか。

(栄原) 石山の帳簿であるので、売却も購入も石山で行われていると考えるべきであろう。利鞘稼ぎの可能性の方が高いのではないか。

(安富) 利鞘稼ぎとすると、相場が変動するかなり分厚い米のマーケットがあったということになる。

(栄原) 米相場の変動は季節などによりかなり激しい。

(中島) 「米売価銭用帳」に出てくる日付は買った日か。

(栄原) 銭を支出した日付である。

(中島) 9月だと収穫期直後だから、安く買えたということか。

(栄原) そう考えることができる。

(鈴木) 市の司の估価(物価)報告義務について、私は今まで律令的な大義名分と見ていたが、そのようなことが仮にあったとすると、実際に市の司の必要な業務であったということになる。

(栄原) 実際に東西それぞれの市の値段を調べ、安い方で買うよう指示している資料もある。市の値段は間違いなく調べている。

(安富) 史料を見ていくと、銭とそれ以外のものの峻別がかなり厳しく行われているようにみえる。中世では宋銭と米などはかなりオルタナティブである。また、高島などでも銭が使われているのが衝撃であった。

(鈴木) 問題は、官から銭が出ていき、銭の行き先で地下の人々がどう使うかである。和同開珎は政治的バックボーンがあったので、その受け取りは、十分に考えられる。その受け取った銭で人々が何を買おうとしたのか、あるいは還流するような動きがあったかである。

(中島) 中世後期に、高島郡周辺を縄張りとする五箇商人がいて、保内商人・得珍保の商人が高島へ出かけていき、若狭方面とつながる交易をしているということがよく出てくる。古代に、石山と高島で交流があり、さらに若狭へつながるのかどうか興味深い。

(田中) 史料8ページ⑫に「古一千文 新一百文」と出てくるのは面白い。

(鈴木) これは完全に10倍通用の例である。10ページに「新二貫 古六貫」とも出てくる。

(松村) 10倍の関係になっていない。

(安富) この二つの数字はイコールか内訳か。

(栄原) 内訳だと思う。合わせて8貫ということである。

(井上) 史料の量に圧倒された。古代に流通の世界があることを、この史料をもとに、ぎりぎりの線まで追いつめ、ある筈であると推定されていることがよくわかった。

(栄原) どこまで言えるか、ギリギリまで突き詰めていかなければならない。まず立脚点からスタートしたということである。

(田中) お金の還流ルートが帳簿には出てこないが、写経所は写経生がかなり借金をしていると思うが、写経生に払われる功賃がここに出てきているのか。前払いや借錢も有力なルートかと思うが。

(栄原) 写経所も出挙はやっているが、石山では行っていない。相当なお金が奈良から送り込まれている。市があるのは、お金が回っている証拠だろう。それをどうしたら捉えられるかを考えなければいけない。

(中島) 興福寺・法華寺であれば都周辺の話になってしまうが、近江の北の方まで含めるとなると古代の銭貨流通の広がりが見えて面白い。その中で勢多荘の役割が興味深い。勢多荘はどういう機能を果たしていたのか。

(栄原) おそらく東大寺の荘と考えられる。いわゆる荘園・農場ではなく、東大寺が流通を意識して、勢多のような流通拠点に小面積の土地と事務所を構えた荘だと思う。東大寺などの奈良の寺院では、建築資材とそれに伴う人・モノの動きが莫大である。勢多は、琵琶湖から、北陸、東日本へつながる物資流通の拠点となっており、奈良の寺院や役所が勢多周辺に荘を持ち、ここに市ができたのではないか。西の入口が難波、東が勢多で、寺院などはそれぞれに拠点をもち、各地から入ってくる諸物資は勢多と難波にプールされ、指令に応じ物資がそこから運び出されたのであろう。このように勢多は、物資の保管・集積機能と物資の調達機能を果たし、東大寺を運営していく上で重要な役割を果たしていたと思われる。

(中島) 「荘」と呼ばれていることの意味は何か。

(栄原) 「荘」は荘園というイメージで捉えられやすいが、私自身は役所・拠点といったイメージである。荘は荘園とイコールではない。荘が農場的機能を果たすようになってくると、それが荘園である。荘には様々な役割がある。東大寺を運営していくうえで、様々な場所に荘は必要であり、そのネットワーク全体で東大寺が動いている。その一部がこの史料に姿を現している。

(中島) 荘という字であるが、中世では庄であり、草冠の字は見ない。

(栄原) 古代は草冠である。

(鈴木) 中世には勢多に何があったかはわかるか。

(栄原) わからないがこの辺りは手放せない場所であろうから、続くであろう。

(鈴木) この地域には石山寺を作るにあたってかなりの銭貨の流入があり、物資の調達に銭貨が有効な財として機能していた。

今後問題としていかなければいけないこととして、2つの展望を挙げるのが

できる。一つは、今日取り扱った流通の先の問題、つまり地下での流通・還流の問題。もう一つは、石山は中央特権的な場所であり、中央直結的である。そういう場所に加え、中央からもう少し離れた場所で、貨幣の動きがどういう形で有り得たのか。石山を一つの例として捉えながら、もう少し全体的な中で貨幣をどのような枠組みで捉えられるかが、古代貨幣の性格を決めていくうえで非常に重要な問題になるであろう。

以 上